

令和8年度 第1回 安曇野市水環境審議会 会議概要

1	審議会名	令和8年度 第1回 安曇野市水環境審議会
2	日 時	令和8年5月15日 午後2時00分から午後4時00分まで
3	会 場	安曇野市役所 本庁舎3階 全員協議会室
4	出席者	遠藤委員（会長）、保尊（利）委員、山崎委員、矢花委員、新村委員、門崎委員、保尊（と）委員、森岡委員、本間委員、
5	市側出席者	赤沼（市民生活部長）、百瀬（環境課長）、所（課長補佐兼環境政策担当係長）、丸山（環境政策担当）、高橋（環境政策担当）
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	0人 記者 0人
8	会議概要作成年月日	令和8年5月29日

協 議 事 項 等

次第

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 報告事項
 - (1) 令和7年度事業の点検・評価等
 - (2) 落ち水流量調査結果
- 4 協議事項
 - (1) 前回会議の振り返り
 - (2) 改定計画骨子（案）
 - (3) 新規施策の方向性
- 5 その他
- 6 閉 会

会議概要

- 3 報告事項
 - (1) 令和7年度事業の点検・評価等

事務局：（資料1、p.7まで説明）

委 員：「水を大切に誇りに思える施策」にて言及された、あづみの水結かき氷は、地下水のどのような特性を活かしたものなのか。また、これが生まれた経緯を知りたい。

事務局：製氷に使用した水を「還元井」によって地下に返すという、独自の地下水保全に取り組む市内の水製造事業者と市が主体となって始まった活動である。安曇野の地下水のブランド化を兼ねつつ、市民が地下水保全を考えるきっかけにしてもらうことを目指している。

委 員：水が不足する冬場の涵養施策について、その後の進捗はいかがか。

事務局：現在、冬場の落ち水のポテンシャル評価などを進めている。今後はこの落ち水を有効利用するための体制構築が課題となるため、引き続き検討を進めていく。

委 員：水結（みずゆい）に登録しているが、活動への具体的な参加方法が分からない。これまでの活動実績や、SNS 等を活用した今後の情報発信・イベント周知の方針について伺いたい。

事務局：これまでは憩いの池の掃除や水巡りツアー等を実施してきた。今後は登録者が「伝える側」となる活動を強化したいと考えており、教材の制作等を進めている。情報発信については、SNS を登録団体のイベント紹介の場として活用するほか、市主催のイベントへの参加案内は、登録者へメールや郵送で直接連絡する。

委員：課題に対する解決策の検討として、令和7年度の企業版ふるさと納税は増加傾向にあるとのことだが、過去、麦後湛水等を目的に一般会計で割り当てられた予算と比較して、割合や規模感はどれくらいなのか。

事務局：水環境関連への納税額は、令和6年度の約60万円に対し、令和7年度は約90万円となっている。

会長：市内氷製造業者の氷は、天然の氷を削ったものなのか。それとも安曇野の地下水を人工的に冷やして作ったものなのか。

事務局：地下水をくみ上げ、人工的に冷却・製氷したものを使用している。

会長：他県の小学校の事例で、環境学習の一環として冬場に氷室（ひむろ）を作り、夏まで溶かさないう工を子どもたちが競う取り組みがあると聞いた。こうしたユニークな事例を参考に、環境学習と絡めてみてはどうか。

事務局：該当の事業者は面白いアイデアに非常に前向きである。後日、この事例を共有したい。

事務局：（資料1、p.8以降の説明）

委員：「硝酸態窒素」は、空気中にある「窒素ガス」とは違うものなのか。

事務局：空気中の窒素とは別物である。主に農業用肥料や畜産の堆肥、糞尿などが由来と言われており、海外の研究では高濃度の水を妊婦が摂取すると胎児に悪影響が出るという報告もあるため、近年注視されている。広大な農耕地帯が広がる三郷周辺は、地域特性として数値が比較的高いことを市でも把握している。国の環境基準を超過する状態ではないが、引き続き重点的な調査項目として注視していく。

委員：資料にある「ローマ数字（Ⅰ・Ⅱ）」の違いは何を表しているのか。

事務局：調査対象とする井戸の種類を示している。Ⅰは一般家庭や企業の敷地内にある井戸（最高値7.2を検出）であり、Ⅱは特に農耕地帯に位置する井戸から採水しているため、数値に差が出ている。ただし、いずれも同じ地下水流域内のため、全体としては同様の変動傾向を示している。

委員：地下水採取届出書の受付結果にある「総揚水量」について、表とグラフの数値が一貫していないが、どちらが正しいのか。

事務局：表中の数字が正しく、円グラフの中心は3,557万m³/年が正しい数値となる。資料の更新ミスであり、訂正させていただく。

委員：地下水位・湧水量の変動傾向について、地域によって年間の水位変動が激しいところと、ほぼ一定であるところがある。穂高の湧水は湧水量の変動幅が大きく、水位が高い場所では水位変動が大きくなる理由を解説願いたい。

事務局：地下水位は標高で表記しており、基本的には西側の山沿いなど「標高の高い地域」の方が年間・季節の変動幅が大きく、東側の湧水地帯など「標高の低い地域」ほど変動幅は小さく安定する傾向がある。これは、西側の山沿いは厚い砂礫層が分布し地下水の涵養域であることから、降水や河川水の影響により水位が上下しやすいのに対し、湧水地帯は地下水の出口となっており変動幅が小さく安定するためである。

事務局：湧水量観測所の記録は川として流れている場所の「水位変動」を示したものであり、豊科憩いの池はほぼ変動していない。穂高の湧水は、大王わさび農場の少し北側の蓼川と万水川の合流地点付近で計測している。そのため、万水川の水位の影響を強く受け、大きく変動している。

委員：豊科憩いの池はほとんど変化はないが、穂高の湧水に関しては、河川水位の影響を強く受けていると見て良いか。

事務局：問題ない。豊科憩いの池は、隣にある県民グラウンドの下に集まった地下水が湧き出した直後の場所を測っており、河川水の影響を受けず、安定した傾向を示している。一方で、穂高の湧水の方は、合流する河川自体の影響も受け、測定している水路自体は湧水路ではあるものの、地上を流れている距離が長く、集水面積も広いとため、大雨が降ると地上の雨水がそのまま流れ込むことになる。そのため、雨や河川由来の状況に大きく左右されやすい。

(2) 落ち水流量調査結果

八千代エンジニアリング：(資料2の説明)

委員：3月16日の調査時は奈良井川の頭首工が開いていたとのことだが、取水が常時行われている中で、各地点の流量を単純に比較して議論することは可能なのか。

八千代エンジニアリング：1日の中での取水量変動による影響を評価するため、頭首工に最も近い「地点1」にて、調査の開始時と終了直前の2回、流量観測を行った。その結果、両者の数値にほとんど差がなかったことから、調査日の取水量はおおむね一定であり、各地点の流量を単純比較しても問題ないと判断した。

委員：地点6から地点7にかけて流量が増えている理由を知りたい。周辺の開発に伴う排水などの流入と捉えてよいか。

八千代エンジニアリング：おそらく西方からの沢水などが流入しているためではないかと推測しているが、現時点で実際の流入状況や詳細な内訳までは確認できていない。

委員：流量観測は拾ヶ堰の左岸側から流入する量を測定しているのか。また、拾ヶ堰には途中に堰がいくつもあるが、それによって水位が上がり、正しい流量が測定できていない可能性はないか。

八千代エンジニアリング：流量観測は、流入量ではなく「拾ヶ堰の内部を流れる総量」を測定している(水路の流下断面積×流速で算出)。また、堰による水位上昇の懸念については、観測地点の選定にあたり、下流直下に堰がなく、かつ周辺からの流入による返り水の影響を極力受けない場所を慎重に選定して測定している。

委員：水温について、地点4で低い値を示しているが、これは雪解け水の流入によるものと考えられるか。

八千代エンジニアリング：水温は流入する水の影響を受ける一方で、水路の流れが緩やかなことや、地表近傍を流れることから日光や気温の影響も大きく受ける。そのため、現時点では雪解け水がどの程度寄与しているか、具体的な原因までは特定できていない。

4 協議事項

(1) 前回会議の振り返り

会長：今回は該当事項なし

(2) 改定計画骨子(案)

八千代エンジニアリング：(資料3の説明)

事務局：「3.安曇野市が目指す将来像」の右上にある「計画を必要とする期間」について、令和9年から14年まで(6年間)ではなく、令和9年から13年までの5年間の間違い

ではないか。

八千代エンジニアリング：ご指摘の通りである。令和9年から令和13年までに修正する。

委員：「4. 目指す将来像に向けた基本的な考え方」の基本戦略について、現在は「対象エリアと手法の広域化」という表現になっている。しかし、範囲の拡大の中に手法の話が混ざってしまっていて少し分かりにくいので、「対象エリアの広域化」と「手法の多様化」の2つに項目を分けた方がよいと考えるが、いかがか。

八千代エンジニアリング：分かりやすさの観点から、項目分けを検討する。

委員：昨今さまざまな災害が話題となっているが、例えば富士山の噴火や地震といった災害がもたらす影響について、本計画の中で触れることは可能なのか。

事務局：今回、新規施策として「災害用井戸の活用」などを検討している。その前提（前振り）として、地震などの危険要素が地域にあるということを背景に盛り込む程度であれば可能と考えている。

会長：前提として災害リスクなどの危険要素を示し、「だからこそ私たちの資産・資源である地下水を有効に活用する必要がある」というストーリーにするのは非常に良い流れだと感じる。災害時の地下水利用は事例も多く、考慮すべき視点ではある。ただ、本計画（水環境基本計画）はあくまで「平常時の長期的な5年間の水利用計画」が主軸であるため、災害対策を全面に出しすぎると計画の趣旨との両立が難しくなる。あくまで計画の一部として災害時の活用に触れるバランスが良いのではないか。

事務局：市の災害危機管理課とも調整しながら進めていく必要があるため、今後も共有できる情報があれば適宜連携していく。

委員：施策目標にある「名水の里」という表現は、どこか特定の場所を指しているのか。

八千代エンジニアリング：具体的にどこか一箇所を指しているわけではない。安曇野市が昭和の名水百選に選ばれた湧水群を有していることから、その象徴として「名水の里」という書き方をしている。

委員：特定の対象地が見えないと、市民の意識醸成や自分ごと化につながりにくいのではないかと懸念する。

委員：国・県・松本盆地との連携強化について、もしすでに具体化している協議会などの組織があるならば、その名称を計画内に明記した方が良い。

委員：施策の目標設定について、前回の300万 m^3 という明確な数値目標から、今回はすべて「KPI」に変わっており、具体性に欠ける印象を受ける。例えば、行政のKPIが「協議会の開催回数」では、会議をただで目標達成となってしまう実効性が見えにくい。もし今回300万 m^3 という絶対量を出さないのであれば、300万 m^3 から減らさないように努力するなど、何らかの具体的な数字を計画に入れることはできないのか。

八千代エンジニアリング：まさにそこが今回の重要なポイントだと考えており、指標のあり方は継続して検討しなければならない。補足すると、前回は300万 m^3 という分かりやすい数値目標があった反面、地下水の流動は非常に大きいため、「300万 m^3 を掲げたことで本当に地下水が戻ったのか」という因果関係や効果が見えにくかったという背景もある。今回は目標自体を「取組人口の拡大」や「範囲の拡大」といった「行動目標」へとシフトしている。その行動目標に対する適切な数値目標もしくは指標については、どこまで具体的に設定できるか、引き続きご意見をいただきながら考えていきたい。

会長：確認だが、ここでのKPIというのは、地下水量のように直接数値化しにくい目標に対して、その進捗度合いを測るために設ける指標、という認識でよいか。

八千代エンジニアリング：KPIは、取り組みを具体的に定量化して達成状況を評価するための「中間プロセス指標」と理解している。ビジネスの例で言えば、最終目標である「売

上を1千万円増やす」ために、「営業活動を何回する」「技術提案を何回する」という手前の行動を数値化するようなイメージである。それを達成したからといって必ず売上が増えるわけではないが、プロセスの進捗を管理するために適切な指標を設けるものである。

会 長：そうすると、今回目指すべき最終目標である KGI は何になるのか。

八千代エンジニアリング：現段階では、先ほど申し上げた「取組人口」や「範囲拡大」の具体的な最終数値をまだ決定していないため、今後そのゴールとなる具体的な数値を定めていくことが KGI になると考えている。

会 長：現時点では全体の骨組みとして、先にプロセスの指標である KPI を先行して検討している段階、と理解した。

(3) 新規施策の方向性

八千代エンジニアリング：(資料4の説明)

委 員：施策体系3「水を清らかなまま維持」の施策名称「生物多様性の維持」について、水生生物を観察して水がどれほどきれいなのかを調べるような内容だと推察するが、「生物多様性を維持する」は生態系全体の保全を想起させるため、実際の取り組み内容とずれるのではないかと考える。「水質の維持」の方が実施内容と調和的かと思うが、いかがか。

八千代エンジニアリング：河川清掃などの取り組みの中で、生物多様性が育まれるように維持をするといった書き方もあるのかと考えている。

会 長：特定の水生生物の有無や割合の変化など、水質の指標となる生物はあるのか。

委 員：水質の指標となる生物がいる。施策名称に入らなくても、生物を指標に使うなど、何かそういう形で計画に入れ込んでいただきたい。

事務局：環境省が水質の指標となる「指標生物」をリストとして公表している。安曇野市でも「生物多様性や生き物保全」の施策として、子供向けの自然観察会を年3回実施し、水質についても考える機会を設けている。水環境基本計画の中でも、「きれいな水に住む生き物が住めるような環境を市全体で維持し、生物の観点から水環境に関与するような人や機会を増やしていきたい」という意図があり、このような表記にしている。表現については、今後検討する。

会 長：生物に関連する活動も水結の一環として捉え、その相乗効果についてもご検討いただきたい。

委 員：「安曇野の自然環境を維持する」「きれいな自然を保全する」という点では異論はないが、「地下水保全」の観点では、水の中の生物はいない方がよい。

湧水などの水環境についてアピールするのであれば、貧栄養な地下水環境でしか生きられない特殊な生物に着目して水の清らかさを証明することができるが、多様性の観点とは異なる。「水源としての側面では水の中に生物はいない方がいい」という考えと、生物多様性の整合性の付け方に留意いただきたい。

事務局：さきほどの「生き物の虫を調べて、子どもたちに対してこの水が清らかかどうかを教える」という活動だが、市内の烏川溪谷でも実績がある。烏川溪谷はまさに安曇野の地下水の源であるため、溪流の清らかさが地下水質に寄与することを知るという意味合いで取り組むのが良いと考える。一方で、水質に関する施策は、長野県の範疇になる部分も多く、市独自に取り組む具体的なアイデアをひねり出すのに苦労したという経緯がある。今後もアイデアあれば、お気軽にお伝えいただきたい。

会 長：新規施策の「気候変動対策と地下水」について、他の自治体にはない独自の項目であり、魅力的であると感じる。具体的なアイデアとして、「地中熱利用施設」などの導入件数

でどのくらい省エネが進んだかを算出して、その省エネ分を CO₂ 削減量に換算するのはいかがか。

八千代エンジニアリング：地下水と CO₂ を直接結びつけられる内容が限られていると感じる。安曇野市ですでに取り組まれている既存の内容も踏まえて、連携した取り組みを CO₂ の削減量に置き換えていく方向を検討している段階である。

5 その他

(全体意見)

会 長：現行の計画と新しい計画の違いは、3つの多様化にあると考える。1つ目は「参加者の多様化」であり、参画者が多様化している。2つ目は、「取り組み領域の多様化」であり、災害時の地下水利用・復興対策・生物多様性など、新しい領域を取り入れている。3つ目は「手法の多様化」であり、現行計画の水田涵養の一本から、企業の節水や雨水浸透など、取り組み方法が多様化している。

八千代エンジニアリング：まさにその通りであると考え。現行計画は地下水涵養などの取り組みにより「結果的に地下水を増やす(減らさない)」側面があった。一方、今回の計画は地下水を増やすこと自体が目的ではなく、「水環境の創出」にシフトしている。今後は生物多様性なども含めた水環境の創出につながる内容に変えていく必要があると考える。その落としどころや文言の表現について、引き続き検討していきたい。

事務局：令和8年度第2回安曇野市水環境審議会は、8月7日(金)14時からとしたい。

6 閉会

以上